



互いの違いを認め合いながらつくりあげるシンクロマット

中学校第1学年 B 器械運動 ア マット運動

1 単元目標

- 技ができる楽しさや喜びを味わい、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技を滑らかに行うことができるようにする。またグループで互いの違いを理解し、それを生かし合ってシンクロマットを作成することができるようにする。  
【知識及び技能】
- 一つ一つの技やシンクロマットの構成などの自己や他者の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。  
【思考力、判断力、表現力等】
- マット運動の学習に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする、健康・安全に気を配ることができるようにする。  
【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 互いの違いを認めながら運動の楽しさを味わう教材化の工夫

**シンクロマット**：グループの仲間と共に、お互いに補助をしたり励まし合ったりしながら連帯感を高め、協力しながら一つひとつの技や演技ができるようになることで達成感を高め、マット運動の楽しさを味わうことができるために、シンクロマットを行う。シンクロマットとは、グループで、個々の技や動きを組み合わせ、様々な隊形やタイミングを工夫して、動きの緩急や強弱を付けたりして表現するマット運動の演技のことである。また、技能レベルや性の違いを超えて取り組むことができるというよきももつ。

(2) 男女共習において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできるグループ活動

**グルーピング**：体力や体格に差があっても協力して取り組むために、全グループの技能レベルと男女の割合が均等になるようなグルーピングを行った。その際、技能や性差等は関係なくリーダー（1人）決めるようにした。

単元の冒頭に、基本的な技によるレディネステストを行った。その結果をもとに、グルーピングの構成ポイントとして、①自己に適した技を選択すること、②自己に適した技に応じて動きの緩急や強弱をつけて演技を構成することという二つのことを提示した。その結果、マット運動が苦手な生徒も意欲的に参加でき、また課題解決の練習ではできない技に挑戦することができた。また、グループ内の技能の高い生徒が補助をしたり賞賛したりしていた。

動きの緩急や強弱を構想している際には、どのような技を選択すれば次の場面に滑らかに繋がっていくか、全員が滑らかに技を行うことができるかについて思考を促した。その結果、技能レベルや性差に関わらず、お互いに意見を伝えながらシンクロマットを構成することができた【資料2】。特に、技能レベルが低くマット運動が苦手な生徒も、自分の意見を積極的に伝えてグループにアイデアを与えたり、場面毎の練習をする際には「せーの」というかけ声を積極的に発声したりすることができていたことが印象的である。さらに、シンクロマットで使用する音楽を選択する際も同じように話し合い、自分たちの好きな曲でシンクロマットの表現に合った音楽を選択することができた。



【資料1 技毎にグループで練習する様子】



【資料2 意見を伝えながら演技を構成する様子】

(3) 子ども同士・授業者と子どもの学び合い、関わり合いの効果

子ども同士では、単元を通して技能レベルの高い生徒が、技能レベルの低い生徒や苦手な生徒に対して、男女関係なく積極的に教えたり励ましたりして関わる姿が多く見られた【資料3】。また、技能レベルが低い生徒も、シンクロマットにおける演技構成の際に、隊形やタイミングについて自分の意見を積極的に発言したり自分ができる技を一生懸命に練習したりして、グループのために少しでも貢献しようとする姿が見られた。一つ一つの技のポイントをはじめ、シンクロマットにおける隊形やタイミングなどについてアドバイスをし合ったり、失敗したら励まし合ったり成功したら賞賛し合ったりして練習することができた。その結果、一人ひとりが基本的な技の技能レベルを向上させることができ、かつグループで立派なシンクロマットを完成させることができた。授業者と子どもの間では、基本的な技の習得段階においてはグループを巡回してポイントを押えたりどのようにすれば技をうまく行うことができるか発問をしたりして思考を促した。また、シンクロマットの演技を構成する段階においては、各グループを巡回し、授業者が質問をし、場面毎の繋がりや隊形の工夫などについてお互いに意見交換をしながら進めることができた。

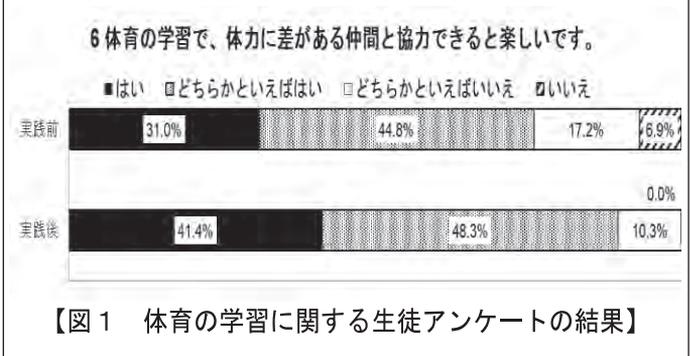


【資料3 互いに自分の考えを伝えている様子】

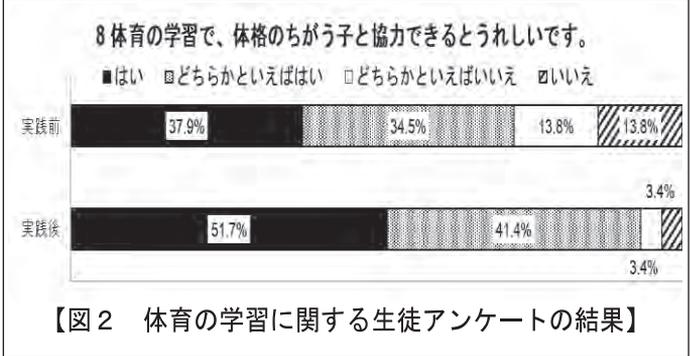
3 成果と課題

(1) 成果

○ 「体育の学習に関するアンケート」において、「体育の学習で、体力に差がある仲間と協力できると楽しいです」という項目で、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図1】。「体育の学習で体格のちがう子と協力できるとうれしいです」という項目では、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図2】。「体育の学習で、ミスした子を責めてしまうことがあります」という項目では、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と回答した生徒が増加した【図3】。これらは、教材化の工夫やグループ活動を位置付けて学習を進めたことが有効に働いたからだと考える。



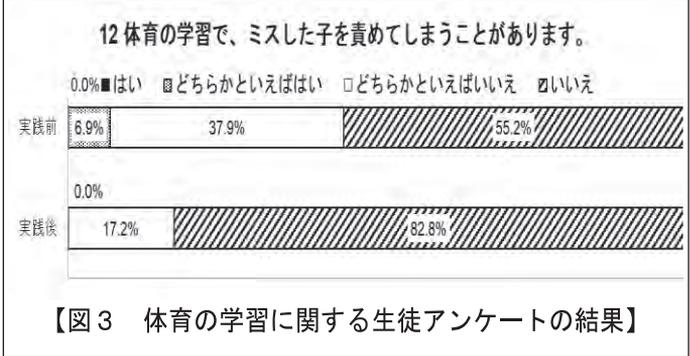
【図1 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】



【図2 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

(2) 課題

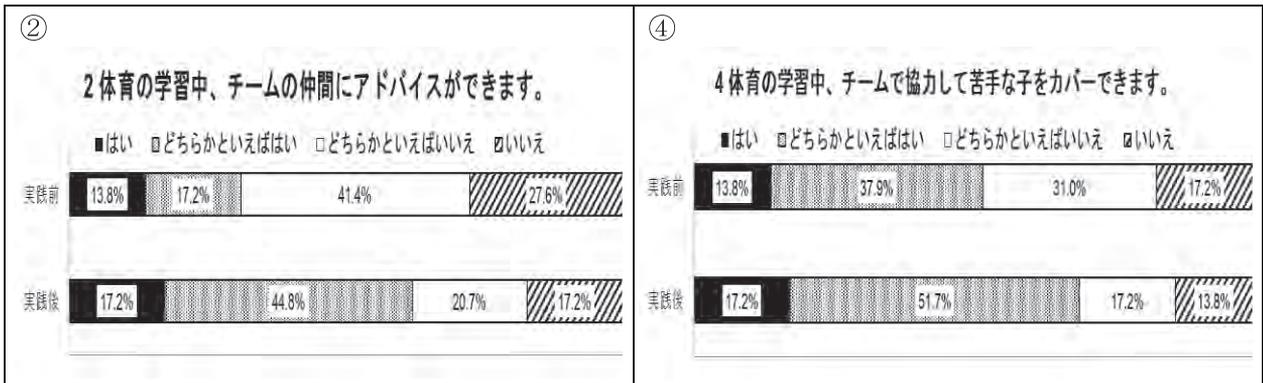
● 生徒が運動課題を解決するために、ICT機器やポイント表を活用してお互いに教え合って練習するだけでなく、各自に応じた支援が必要である。子ども一人ひとりや同じ課題をもった生徒などあらゆるニーズに応じた支援計画を立てて練習を行い、子どもに自らの運動課題を明確にさせることで、一人ひとりの違いを認め合いながら技能を向上することができる生徒を育てられると考える。



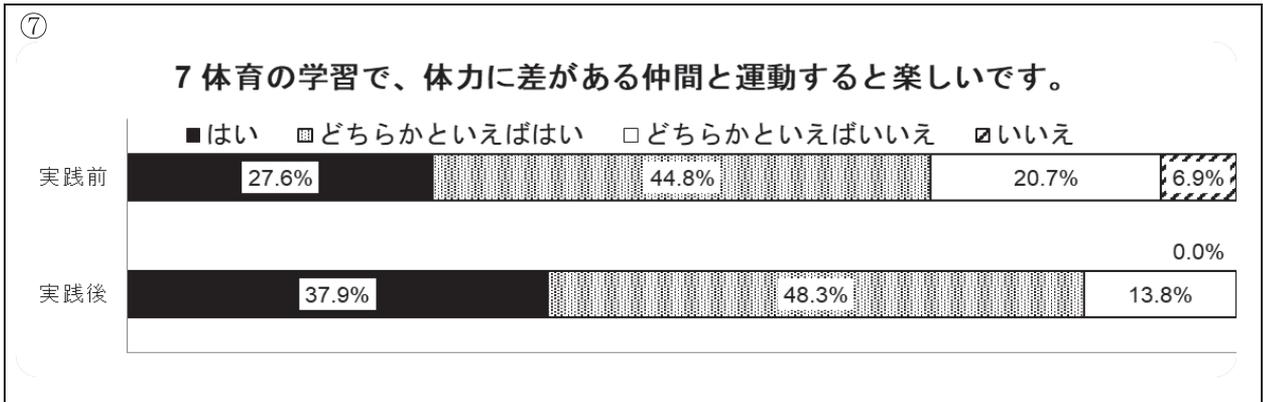
【図3 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

【児童生徒の変容】

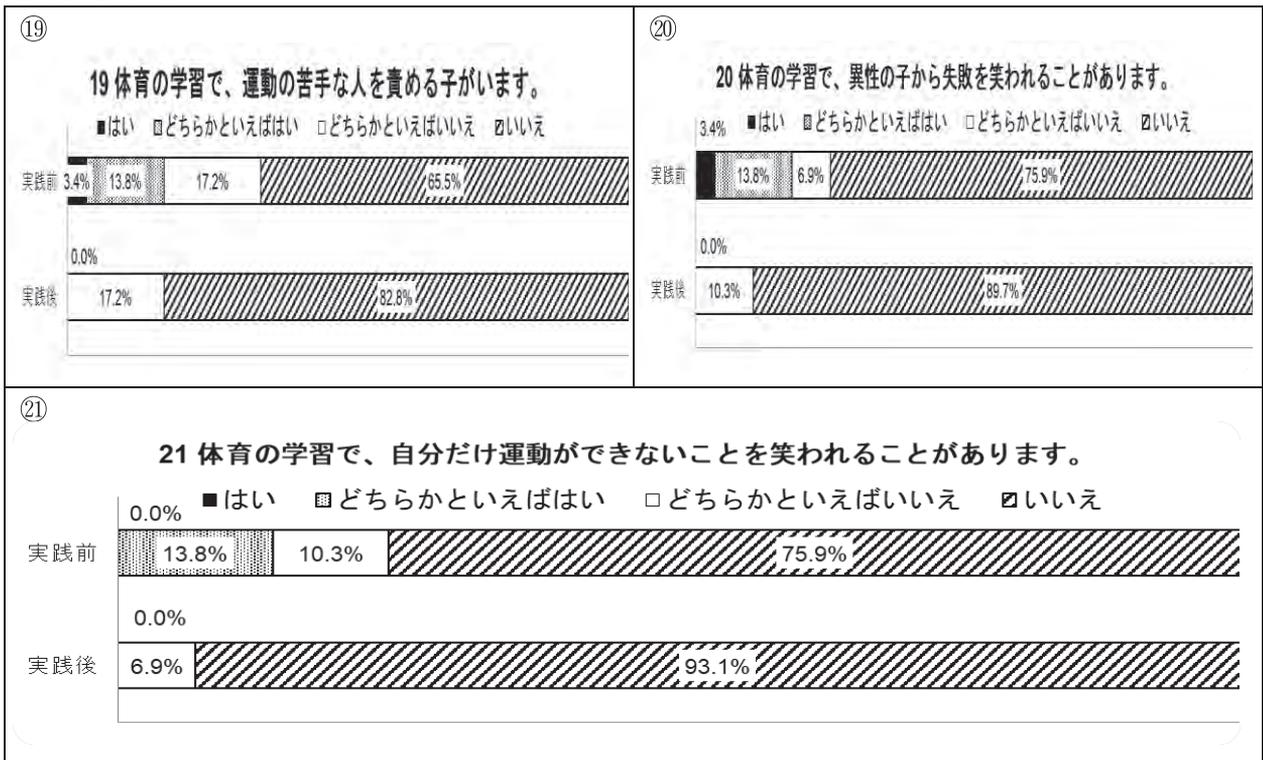
〔Ⅰ リーダーシップ〕



〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔排除雰囲気〕



【授業実践協力者の声】

運動が得意な生徒が、苦手な生徒と一緒に運動をすることを楽しんでいる姿が多く見られてよかったです。学級の男女の仲が深まったように感じています。

